

月刊

いじろのとも

第十五卷

七月号

真の喜び

美味しいものを
食べられる喜び

よい異性に
出会える喜び

人より
優れる喜び

真の喜びは
人の役に立てる喜び
人と心を通わす喜び

出生率1・29の日本

女だけ
産むことのできる
有り難さ
負担と感じる
このエゴ社会

人生を考え直して

みたい人は(一一一六)

空海『即身成仏義』解説(二七)

(十) 円鏡力の故に、実覚智なり
「円鏡力の故に、実覚智なり」とは、此れ即ち所由(しよゆ)を出だす。一切の諸仏、何に因つてか覚智の名を得たもうとならば、謂く、一切の色像、悉く高台の明鏡の中に現するが如く、如来の心境もまたまた是の如し。円明の心境、高く法界の頂に懸かつて寂にして、一切を照らして不倒不謬なり。是の如きの円鏡、何れの仏にか有らざらん。故(かるがゆえ)に「円鏡力の故に、実覚智なり」と曰う。

現代語訳を、金岡秀友訳・解説の『空海即身成仏義』(太陽出版刊)から、引用させて頂きます。

* * * * *
つぎは、第八句「円鏡力の故に、実覚智なり」という句ですが、ここではすなわち、いっさいにもとも限りない仏智がそなわっている、ということが、なぜ「即身

成仏」の「成仏」を意味するのか、その理由(所由)を説明しています。

いっさいの諸仏は、なぜ「覚者」とか「智者」とか名づけられるのでしょうか。

たとえば、高い台の上にかかげた澄んだ鏡(明鏡)に、いっさいの色彩や形像がごとく映つてあらわれるように、如来の心のはたらきを鏡にたとえれば、その心境もいっさいの真実のすがたを、あますところなく映し出します。完全にすべてを明らかにする(円明)如来の心境は、高く真実世界(法界)の最高位である仏界にかかつて、澄みきつた智力(寂)をもつて、すべてのものごとの真実を照らし、けつして顛倒したり、誤謬があつたりすることがありません。このような、いっさいをありのままに明らかにする智(円鏡)が、どの仏にもあるのです。

ですから、この完全に澄みきつた鏡のような智の力(円鏡力)によつてすべての真実を確実に覚智する(実覚智)もの、という意味で、法身のあらわれであるいっさいの諸仏を覚者とか智者とか名づけるのです。

* * * * *
お読み頂ければ、さして難しい語句はないと思います。少しだけ補足説明をさせて頂きます。

私は、この文章を読みますと、法句経の中の一文を思い出します。それは、(二一八)の次の偈です。なお、この解説は、第四卷(平成五年)の一月号で取り上げられます。ご参照いただければ幸いです。

(二一八) 賢明な人がつとめはげむことよって放逸をたち切るときには、知慧の高閣(たかどの)に登り、憂いを去って、憂いある愚人どもを見下ろす。

- - 山上に立っている人が地上の人々を見下ろすように。

この偈は、一見『即身成仏義』で述べられていることと異なることを言っているように思えますが、『即身成仏義』の中の「高台の明鏡の中に現る」とか、「高く法界の頂に懸かって寂にして、一切を照らして」といった言葉は、「高閣の登って」、地上を「見下ろす」といった、解脱に至ったときの実際の体験に基づいていなければ、出てこない言葉のように思うのです。

実は、私も、真言密教の修行を終えて間もなくの頃、四国八十八カ所めぐりの途中で、偈に述べられているのと同じだと思える体験をしたのです。それは、ある札所への参拝の途中、山上から見下ろす町並みが、まるで箱

庭でも見るように、手に取るように見えたのですが、それが、そのまま「自分の心境」そのものだ、つくづく思えたのです。そういう体験があつて、この偈は忘れられないものになっています。

もう一つ思い出しますのは、『老子』の中の一章の次の文です。なお、この解説は、第五卷(平成六年)十二月号で取り上げています。ご参照いただければ幸いです。

(第四十七章) 家から外に出ないでも、世の中のと(天下)が分かり、窓から外をのぞいて見なくても自然の理法(天道)が分かります。かえって、外へ遠く出かけるほど、いよいよ知ることが少なくなっていくます。

ですから、道の体得者である聖人は、出かけないで知り、見ないで明らかに成る、為さないうで成るのです。

この老子の言葉のように、「家から外に出ないでも、世の中のこと(天下)が分かり、窓から外をのぞいて見なくても自然の理法(天道)が分かる」からこそ、「一切の色像、悉く高台の明鏡の中に現るが如く、如来の心境もまたまた是の如し」と言えるのです。

自作随筆選

付和雷同と日本人

毎日新聞には「経済観測」というコラムがあるのですが、そこにペンネームを幸兵衛という方が、「世論と空気が」と題して、意見を寄せておられました。その趣旨は、日本人は、四半世紀以上も前に山本七平氏が指摘した通り、「日本の社会や世論は正体不明の『空気』で動かされる」ということを、最近、改めて感じる、というものです。

そして、この「空気論の根底にあるのは、同質社会、狭いムラ社会という特有の構造。それが外に対する閉鎖性、排他性につながる」とされています。

この記事を読んで、私は、常々思っていたのですが、「付和雷同」という言葉の方が、この空気論よりも、もっと的確に現在の日本人の精神的特徴を表すのではないかと思ひ、この文章をしたためることにしました。

因みに、付和雷同を広辞苑でひいてみますと、次のように書かれています。

ふわ - らいどう【付和雷同】

自分に一定の見識がなく、ただ他の説にわけもなく賛成すること。

ところで、日本社会では、永い間、仏教を精神的な支えとしてきました。それは、聖徳太子の十七条の憲法にありますように、「和なるを以て貴しとす」という精神によく現れています。この言葉は、「私は絶対的な境地（解脱）に至っていない、まさに相対的な存在である。

そして、あなたもそうだ。ということは、お互いに、自分に執着して過ちを犯す存在だ。だから、私たちは人間は、譲り合わなければならぬのだ」と教えるものです。

また、仏教は、人は、自分のこころの中に仏（如来）さまを宿していて、死ねばみんな仏に成る、つまり成仏すると教えています。

そうした教えでは、少し飛躍するかも知れませんが、我（自我・吾我）への執着を捨てて、互いに「こころ」で繋がることを勧めているのです。それは、例えば「慈・悲・喜・捨」という「四無量心」によく表されています。私は、これを、「誰に対しても常に関心をもつていて、人の悲しみを我が悲しみとし、人の喜びを我が喜びとする」と解釈しています。私の言葉で言いますと、誰に対しても、「こころ」の働きとして、常に他者と「情動の共有」をすることだということです。こうして、日

本人は、他者との「こころの通じ合い」によって社会を維持して来たといえるのです。

ところが、日本では、太平洋戦争に負けて以来、アメリカから徹底した民主主義が導入されるとともに、不幸にも公的學校での宗教教育が禁止されてしまいました。その結果、仏教は、すでに明治の初め廃仏毀釈令によって、葬式仏教に追いやられていたとは言え、日本人から完全といえるほど失われてしまったのです。

このことは、人と人がこころで繋がるということが失われて、それに代わって、資本主義の行動原理である、人が互いに「利益と選好」で結ばれることになったということの意味しているのです。

キリスト教をこころの支えとし、民主主義を發展させてきました欧米社会では、人と人は、「個」として、神を通じて繋がっていました。神が私たち人間を愛して下さっているように、私たち人間は、隣人愛として、お互いに他者を愛さなければならぬとされて来たのです。いわば、建前として、神を通じて間接的に繋がっていると言えます。仏教のように、お互いに仏を宿した存在として、直接的にこころとこころで繋がるのは、かなり違っています。

こうした欧米社会では、自己を主張する民主主義・資

本主義と、自己の主張を抑え、他者のために愛の奉仕が求められるキリスト教とが、「自己」と「他己」としてバランスを保って社会的に發展してきたのです（現在、徐々に「自己」が重視されすぎて、キリスト教が失われてきてはいますが）。

ところが、日本では、前述のように互いに仏を宿した存在として、こころとこころで繋がっていたのに、その仏が否定された訳ですから、こころの繋がりが、失われてしまいました。つまり、「和なるを以て貴しとす」とする思想が失われたと言えるのです。

ということは、付和雷同の定義（意味）にありましたように、「自分に一定の見識がなく」なつて来たと言うことなのです。なのに、千何百年にもわたつて、他者と和すことを「よし」としてきたわけですから、定義の後半に出てきますように、「ただ他の説にわけもなく賛成する」という行動様式だけが、残つて来たのです。

欧米では、「他己」の根拠として、強固な神という存在があり、それが弱くなつたとは言え、今も残っているのですが、日本には、自分自身の中にあつた仏を否定されて、他己（仏）の根拠そのものが失われてしまったのです。その結果、資本主義的な「利益と選好」のみを行動原理として、付和雷同しているのです。

自作詩短歌等選

何故人間は差別するか

人間は相対的存在

だから

他者と自分を

相対的に比較したがる

それが

優越欲となる

そこに

差別が生ずる

弱者を食い物にする

国民の

所得格差が

広がりに

強者弱者を

食い物にする

エイズ孤児220万人

サハラ砂漠以南の

アフリカでは

年間220万人が

エイズで死亡し

その結果

エイズ孤児が

1100万人に

達しているという

大人の自堕落な生活が

子供に深い業を

背負わせているのだ

なぜ暴力傾向が強まる

子供たちの

暴力傾向が

なぜ強まるのか

暴力的格闘技

K-1の影響

様々の暴力的な

ゲームの影響

氾濫する暴力的な

マンガ・小説の影響

家庭での父母による

暴力的しつけの影響

つまり

日本社会全体が

暴力的傾向を

強めているから

ということになる

暴力的傾向は

他己萎縮・自己肥大の

結果として

優越欲の満足を

求めるためなのだ

けちに徹する名古屋人

名古屋人

けちに徹して

苦境ぬけ

いまや日本の

手本になりぬ

白人農民の支配

ジンバブエでは
優良農地の70%を
白人農民四千五百人が
支配しているという

一方

黒人住民千二百万人は
農地を手に入れることが
できないでいる

そこで

ムガベ大統領政府は
白人の土地を強制収用し
黒人農民に配分するという
国土再配分政策をとった

その結果

欧州諸国の怒りをかい
経済制裁をうけ

経済は

壊滅状態になっている

いま

白人農民は

ナイジェリアに

移住しようとしている

ジンバブエと同じことが
起こらないことを祈るのみ

最後の一線易々と

犯罪の

最後の一線

やすやすと

越え行く子らに

何をか教えむ

少女の起こす凶悪事件

中2女子

5歳の男児

突き落とす

またも起こりし

年少の

少女犯せし

凶悪事

他己の萎縮や

ますます進みぬ

国のかたちを示せない

政治家が

国のかたちを

示せない

ほかの誰かが

示せるのやら

若者の精神的特徴

いまの若者に

多かれ少なかれ

共通に見られる

精神的特徴

固い自我形成

他者性の萎縮

攻撃性の高まり

暴力傾向の高まり

欲求不満耐性の減弱

共感性の衰退

情動共有性の不全

これらは全て

自己肥大・他己萎縮に

由来するもの

積尊のこつば（一三五）

法句経解説

（三九七）すべての束縛を断ち切り、怖れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、かれをわれは バラモン と呼ぶ。

私たちは、多くの人間関係（絆（きずな））によって、束縛されています。親子関係、兄弟関係、夫婦関係、地域関係、勤務先関係、等々によって、がんじがらめに縛られています。

例えば、親子関係で両者が、仲が悪く、互いにいやだと思っけていても、その縁を切ることは、普通、できません。親は子に年老いた時の養育を期待しますし、子は親の庇護・養育を求め、親の財産をあてにします。夫婦関係にいたってはもっと複雑です。たとえお互いにいやな相手と思っけていても、子があれば、子のことを思っけて夫婦関係を解消してしまうわけにはいきませんし、また、もしローンなどで共通の借金があれば、その束縛から逃れるには、相当の覚悟が要ります。また、別れるとすれば、自分と連れ合いの親や兄弟、などのことも絡んできます。親や兄弟が、悲しんだり、腹を立てたりするから

です。勤務先も簡単に辞めるわけにはいきません。男性にとつては、妻や子を路頭に迷わせることになりすし、また、世間から笑われたり、自分の人生設計がくるつたりするからです。

このように人は、多くの束縛をうけて生きています。ですから、こうした束縛の全てを断ち切ることは、極めて困難なことです。大多数の人の場合は不可能なことなです。それは、世間のしがらみでありながら、自分が頼っている精神的な支柱でもあるからです。それらの関係を失うことは、自分の生きる意味をも失うことになるからです。

でも、真の幸せに到達しようと思っけると、回りの人たちに依存し、影響されては、到底、不可能なです。なぜなら、そうしたものは、常に動揺し、変動してやまないからです。そうなりますと、自分の幸せが、その動揺・変動で、影響をうけ、結局、自分の不幸をかこつことになるからです。

ここに、積尊の説かれたこの偈の「全ての束縛を断ち切れ」と言われる意義があるのです。

でも、束縛は同時に精神的支柱でもあるわけですから、単に束縛を断ち切れれば、かえって不安におののくことになつてしまいます。それを避けるためには、別の支えが

必要なのです。それは、信仰です。自分の精神（他己）の神髄（無意識）に宿った仏や神を、自ら心を磨いて、輝かせるのです。お祈りもヨーガ（真言密教もこの中に含まれる）も、それぞれ一つの手段です。でも、ヨーガはもっとも有力な手段だと思います。

このように、仏や神を信じ、ひたすら修行するとき、そのときだけ、人は、あらゆる束縛を断ち切ることができるのです。

そして、そうなるとき、「怖れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人」になれるのです。

そして、絶対的な幸福、絶対的な安心立命を得ることができません。自分の生きる人生は不必要になり、他者のためにのみ生きていくことができるようになるのです。そして、自分自身が自由にコントロールできるようになれるのです。

（三九八）紐と革帯と綱とを、手綱ともども断ち切り、門をとぎす門（かんぬき）を滅ぼして、めざました人、――かれをわれは バラモン と呼ぶ。

このテキストの訳注によりますと、「紐」は怒りの、「革帯」は愛執の、「手綱」は六十二の誤った見解（六十二

邪見）に、それぞれ譬えられている、ということですが。また、「門をとぎす門」は、無明をいうとあります。

さて、偈の解説ですが、この怒りと愛執と六十二邪見は、十善戒の最後の三つにあたっています。それは、不慳貪、不瞋恚、不邪見の三つです。怒りは不瞋恚戒に、愛執は不慳貪戒に、六十二邪見は不邪見戒に、それぞれ対応しています。

この三つは三毒と呼ばれ、十善戒の中でも、もっとも根本的な戒律とされています。ということは、それだけ守ることが難しい戒律だということでもあるのです。

ですから、この三つを断ち切るということは、解脱しない限り無理なのです。偈では、そうした人を「めざました人」と呼ぶというわけです。

次にあります「門をとぎす門（かんぬき）」ですが、訳注によりますと、これは無明のことをいう、となっていて、その無明は、すでに偈の（二四三）で取り上げられました。それは次の通りです。

（二四三）この汚れよりもさらに甚だしい汚れがある。無明こそ最大の汚れである。修行僧らよ。この汚れを捨てて、汚れ無き者となれ。

なお、この解説は第九巻（平成十年）七月号で行っています。ご参照いただければ幸いです。

このように無明は最大の汚れなのですから、この無明を滅することもとても、困難なことです。私に言わせれば、無明を滅することが、即、解脱であると言えると思うのです。

では、無明を滅するにはどうすればよいのでしょうか。

それは、以前にも書きましたが、無明は、髄識（無意識）のことですから、滅しようとは意識してできることではないのです。釈尊の教えを信じて、ひたすら、瞑想やヨーガやお祈りに励むこと以外にはありません。

しかも、これほど修行したから、もう解脱しているはずだ、などと解脱したかどうかをはかってもならないのです。ただひたすら、修行するだけなのです。

（三九九）罪がないのに罵（ののし）られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛（たけ）き人、- - かれをわたくしは バラモンと呼ぶ。

六波羅蜜（布施、持戒、忍辱（にんにく）、精進、禅定、智慧）のなかでも、三番目の忍辱が

まもるのに一番難しいようです。

これまでに解説しました偈の中で、忍辱の徳について触れたものが、次のように、四つありました。

（二三）（道に）思いをこらし、堪え忍ぶことつよく、つねに健（たけ）く奮励する、思慮ある人々は、安らぎに達する。これは無上の幸せである。

（一八四）忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。他人を害する人は出家者ではない。他人を悩ます人は（道の人）ではない。

（三二〇）戦場の象が、射られた矢にあたっても堪え忍ぶように、われはひとのそしりを忍ぼう。多くの人は実に性質（たち）が悪いからである。

（三二一）馴らされた象は、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものともなる。世のそしりを忍び、自らをおさめた者は、人々の中にあっても最上の者である。

釈尊も、堪え忍ぶことの難しさを実感されたのではないのでしょうか。

たとえ自分が悪くない、あるいは自分に落ち度がない、あるいは正しいことを為しているにもわらず、他者の思

惑や策略や誤解などから、非難されたり、罵（ののし）られたり、する経験を、私も、しました。でも、じっと耐えてきました。

その結果、そうしたことをした人たちは、多くは、次に釈尊が述べられている事態が起こっています。それは、既に、出てきました次の偈です。

（一三七、一四一）手むかうことなく罪咎（つみとが）無い人々に害を加えるならば、次に挙げる十種の場合のうちどれかに速やかに出会うであろう、
- - 激しい痛み、 老衰、 身体の傷害、 重い病い、 乱心、 国王からの災い、 恐ろしい告げ口、 親族の滅亡と、 財産の損失と、 その人の家を火が焼く。この愚かな者は、身やぶれてのち、地獄に生まれる。

具体的な事例は、なまなましいことですので、挙げませんが、これが真実であることは、私の幾つもの体験から、明らかです。

でも、このことを人さまに言いますと、その行為によってストレスがかかるからだ、といった解釈をしてくれますが、そんなことはありません。親族の滅亡と、

財産の損失と、 その人の家を火が焼く、といったことはストレスとは無関係だからです。

この十カ条に無くて、私が体験したことがあります。それらは、本人の死亡（最後の「身やぶれて・・・」にあたっているのだと思いますが）、子と孫の交通事故での重傷、子の配偶者の重い病気、本人の地位の喪失、子の死亡（逆縁）、などです。

お大師さんも、遺言の中で、仰っています。「私の死後、天界から雲間の切れ目を通して、この地上を見ているぞ。善いことをしている者には善いことが起こり、悪いことをしているものには悪いことが起こると、思つて身を慎みなさい」と。

こうした、釈尊や弘法大師の言葉を信じる人は、きわめて少なくなっているのだと思います。でも、これは真実なのです。

いま、世界中から、この忍辱の徳が失われてきています。千年以上も前のことを持ち出して、その恨みを晴らすとして、戦争になっています。

日本には「ならぬ堪忍するが堪忍」あるいは「堪忍は一生の宝」ということわざがあります。自己主張を控え、多くの人が互いに堪忍する世界にならない限り、世界に平和は来ないのではないのでしょうか。

後記

一、暑い日が続いています。今年は、特別に暑いようです。熱中症や夏ばてにならないよう、お気を付け下さい。

二、一反ほど植えています稲に、イモチ病が付き、やむなく農薬を散布しました。その薬効で、一部枯れかけていたものが、復活してきています。ホームセンターで聞きましたら、田植えの前、苗の段階でイモチ病を予防する農薬をやるとのことでした。それをやっていなかったからかもしれません。でも、テレビ報道によれば、岡山県の北部地方では、50%ほどがイモチ病にかかっているとのこと。

三、山に近い所の畑に、さつま芋を植えているのですが、それが、まだ、芋が入っていないのに、猪と思われる動物に、一部、荒らされました。猪よけネットをJAで注文しています。稲も山に近いところですので、猪がでるのではないかと心配しています。だんだん農業がやりにくくなってきているようです。

四、耕運機だけでは、稲作は無理だと勧められ、トラクターを買うことにしました。ヤンマー製の中古で、5万円しました。田植え機は買っていますので、あとはコンバインですが、先日、岡山県の灘崎町で開かれたヤンマーの農機具展示会に行ってきました。作付け4反なら、

新品で160万円出せば適当なのがあったのですが、さすがに手が出ませんでした。

五、懸案だった車庫をやっと自分たちだけで組み立てることができました。二人で四日ほどかかりました。引越しが、あと少しだけ残ってます。

六、『即身成仏義』の解説を今月で終わりたいと思っています。難しかったでしょうか。

七、来月から何を取り上げようかと、思案しているのですが、一つの案として「大乘起信論」の解説を、自分の理論を交えながら、行ってはどうかと考えています。大乘仏教論として一番完成していると思えますので。

月刊 こころのとも 第十五巻 七月号 (通巻 一七五号)	平成十六年七月八日 〒708 8511 岡山県津山市北園町50番地 美作大学 児童学科気付
	(ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>ぜんじょう</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 016108 38660	